

他者の思いを受け止め、生かす生徒の育成(1年次)

～自分なりの疑問をもち、他者と共に課題に取り組む方略の研究～

矢吹 怜美

Satomi YABUKI

概要

学習指導要領において中学校美術科で目指すのは「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力」の育成である。これは、造形的な視点を豊かにもち、生活や社会の中の造形の要素に着目し、それらを踏まえたコミュニケーションを通して、一人一人が自分との関わりの中で美術や美術文化を捉えることができるようにするための資質・能力を育てることである。また、美術の学習は、表現したり鑑賞したりする中で、資質・能力を相互に関連させながら育成させることを重視し、「思考力、判断力、表現力等」を高めるために言語活動の充実を図るよう求められている。これを踏まえ、本校美術科における新しい研究においては、コミュニケーションを通して他者の思いを受け止め、自分の鑑賞や表現に生かすことができる生徒を育成することを目的とした。

キーワード：個の鑑賞 協働的な鑑賞 鑑賞における言語活動 鑑賞と表現のつながり 非認知能力

1. はじめに～研究の目的

令和3年4月更新の中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(以下、「答申」)では、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。

また、田村学(2022)は、個別最適な学びと協働的な学びについて「本来期待していた学びは変わるものではなく、異なる文脈からの説明であると考えることができよう(中略)『個別最適な学びと協働的な学び』は、一人一人の個に応じた学び、いわゆるアダプティブ・ラーニングの文脈から示された期待する学びの姿である」^{*1}と述べている。これはすなわち、生徒が自ら学びに向かうことを大切にするとともに、一人一人の生徒に応じた学びの充実に、今まで以上に配慮しなければならないということであり、それをこれからの研究で深めていく必要があると考えられる。

2. 生徒の実態

本校美術科の前次研究では、造形的な視点と表現・鑑賞活動のつながりを大切に、「題材同士の連続性」や「非認知能力の育成」に焦点を当てて実践研究を進めた。その結果、前年度の学習内容を生かしたり、試し活動や構想を振り返り、本題材に生かしたりする様子がみられた。また、交流していく中で他者の視点を理解し合ったり、鑑賞における交流時の仲間の発言を取り入れ自分の考えと比較したりする様子が見られた。

このように、鑑賞時・交流時・表現時の視点を仲間と共

有することで、題材間のつながりに気付く生徒を育成することができたと考える。また、知識同士をつなげるような題材構成を意図的に行うことで、素材や技法に関するメタ認知を高める効果も感じられた。

このような成果を実感した前次研究であるが、最終年次を終えて第2学年の生徒にとったアンケート調査の中で、興味深い記述が見られた。以下である。

記述A

- ・鑑賞したときに使った余白の使い方や、クミイロで表現したときの彩度や明度による印象の違いを使って考えることができた。
- ・表現のときに自分が注意している色使いや絵で表す内容の意味などに着目して作品をみることができた。

※問いは「鑑賞でこれまでの学習を活かすことができたか」

※自由記述による回答

さらに、関連して3学年の生徒にとったアンケート調査の中で、以下のような記述も見られた。

記述B

- ・自主的に意見を言わない人がいた。
- ・人によってその絵の見方が異なるので、結局その絵にはアクセントなどの技法は使われているのか混乱した。

※問いは「鑑賞での交流でよくなかったことはどんな部分か」

※自由記述による回答

アンケートから、記述Aのように表現と鑑賞の経験を相互につなげて生かして生徒がいる一方で、記述Bのよう

に自分の意見が他者の意見によって揺らぐことを不安に思う生徒や、そもそも自分で着眼点を定めて鑑賞することが難しい生徒等が見られた。

本紀要の「総論」でも述べている通り、これからは学びの「セルフ・マネジメント」が重要になる。題材の中で自分がどのように学んでいくか、また、どのように周り関わっていくかを考え実践していく力を伸ばすためにはどのようにしたらよいか以下で触れていく。

3. 美術科を取り巻くこれからの学び

先に述べた「答申」等に見られる新たな教育の施策が出される背景には、Society5.0 やDX(デジタル・トランスフォーメーション)という概念で表現されるような激動の時代が、既に私たちの目の前に立ち現れてきている状況がある。

そうした中で、美術という教科が担っていくべきものは一体何であるのか。以下ではそこに触れていく。

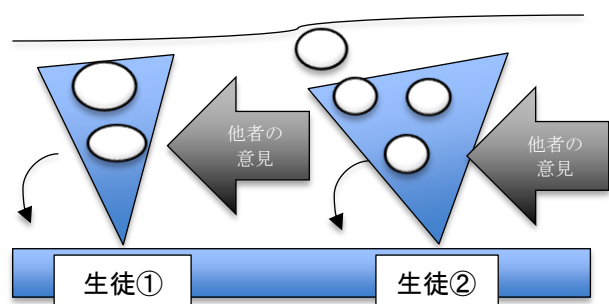
3. 1. 言語活動

「答申」では、表現や鑑賞の言語活動を通して「他者への働きかけ」「他者からの働きかけ」「協働的な学び」から主体的・対話的で深い学びの実現に向かっていくとある。形や色、全体のイメージなどの視点を持ち、表現と鑑賞の活動のつながりを土台としながら、生活や社会と豊かに関わる資質・能力を育成し、豊かな情操を育てていくことが重要である。例えば、作品交流や鑑賞で他者と関わっていく時に、どのように他者に自分の意見や考えを伝えていくのか、他者の意見や考えをどのように受けて止めていくのが大切であると考え。その際に共通認識の軸として「造形の要素」を生かした交流を行うことで、表現と鑑賞をつなげたり、他者との関わり意見を交えたりしていく中で新たな知見に気付くといったことにつながっていくのではないだろうか。

3. 2. 非認知能力

前項では、造形の要素を生かした言語活動を通して、他者と関わっていくことで新たな知見の発見につながる可能性があるとした。その活動に深く関わってくるのが「非認知能力」であると考え。例えば、前述の鑑賞のアンケートより、①「自身の意見を発表することが難しい生徒」や②「周りの意見を聞くと自分の意見が揺らぎ、不安になってしまう生徒」がいた。①の生徒だと、自分の学びに軸がない状態なので、自分で判断する等の学び

を深めることが難しい。②の生徒では、答えのはっきりと定まっていないものを受け止める力が弱いので、他者との交流を自らの学びに生かすことが難しい。①と②の生徒に必要なのは、他者の意見を受け止める柔軟性、そしてそこから考えようとする自発性だと考えた。



軸がないためすぐ倒れるイメージ図

4. 目指す生徒像

本校美術科では、以上の課題や求めを踏まえ、新しい研究の目指す生徒像を以下のように設定した。

自分なりの疑問をもち、他者と一緒に課題に取り組むことのできる生徒

5. 研究主題及び副題

以上のことから、本校美術科の1年次次研究の主題と副題を以下のように設定した。

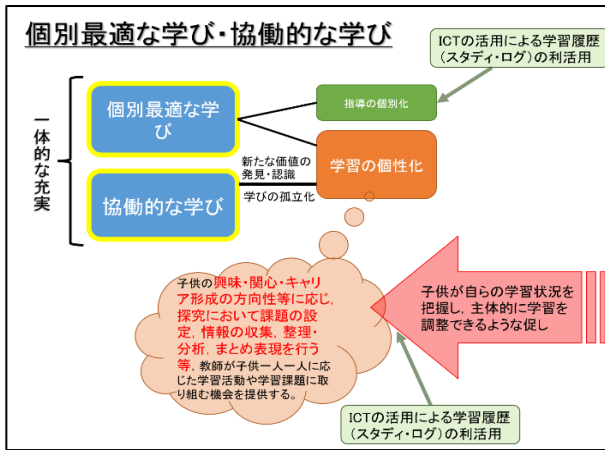
他者の思いを受け止め、生かす生徒の育成(1年次)
～自分なりの疑問をもち、他者と共に課題に
取り組む方略の研究～

6. 研究の内容と方法

本校の1年次研究においては、生徒の実態やこれからの時代の潮流を踏まえ、協働的な学びと個別最適な学びを大切に、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が重要であると捉えている。

なお、本校研究の「総論」にもある通り、1年次の研究で特に重要視しているのは学びの「セルフ・マネジメント」へのアプローチである。課題解決における学習者から見た学びの有意性は、主体的に学習に取り組むための基軸となるものであり、それがひいては各教科等における資質・能力の育成につながるものと考えられるためである。

「総論」で掲げた「個別最適な学びと協働的な学び」の図は以下である。



個別最適な学びと協働的な学びの概念図

この中で、本校美術科では、特に「言語活動」や「非認知能力」に焦点を当てて実践研究を進めることとした。これらが、「4.」で示した目指す生徒の育成に向かう上で重要であると考えたためである。

6. 1. 作品を「よく見る」工夫

前次研究では、鑑賞と表現のつながり、個の題材間の知識の積み重ねに重点を置き学習を行ってきた。それを土台として、新研究では、個の学びと協働での学びをつないでいきたいと考えている。

簡単に言えば、「第1段階」では、これまで同様に個での鑑賞を進め、「第2段階」では、第1段階での学びを元手に協働的な鑑賞を行っていく。

「第1段階」では、一人一人が自分で選択した作品を鑑賞することによって、主に意欲につなげる。この取組は、生徒が作品の良さに気付き、自ら学んでいくためのスタートとして大切であり、最終的には個別最適な学びにつながっているものとする。

また、提示されたものではなく、生徒たち自身が選んだものであるからこそ、必要感のある鑑賞となり、生徒たちにとって意味のある学びになる。

6. 2. 学びに立体感をもたせるためのグループ鑑賞の工夫

「第2段階」では、一人一人が選択した作品を軸に協働的な鑑賞を行っていく。

自分の鑑賞活動を踏まえて他者と協働して学ぶことで、自他の良さを知ったり自分の気付きを広げたりすることができ、学びの深まりにつながっていくと考える。

その際に重要となるのが、言うまでもなく「言語活動」である。他者である以上100%理解し合うことは難しくても、言語を介して粘り強く伝え合うことが重要であるし、そもそも唯一の正解がないことを分かり合いながら言葉

を交わす中で、しなやかさや柔軟性を高めていきたい。

7. 実践と考察

本稿では、第1学年における鑑賞の実践を軸に考察を進めていく。

7. 1. 題材の構想

第1学年『みんなで鑑賞しよう』

7. 2. 1. 授業の実際

本題材では、指導者が用意した14の絵画を鑑賞し交流する。

今まで、第1学年の鑑賞では、単一作品を一斉に鑑賞させ、交流する方法を取ってきた。ある程度鑑賞の経験を積んだことで、複数の作品から一つ自分で選び鑑賞を行う下地ができたと判断した。そこで本実践では、生徒個人に作品を選ばせ、その後、同じ作品を選んだ生徒同士でグループ鑑賞を行った。

本題材の大きな構想は以下である。

段階	内容
1	14の作品から生徒が自分で作品を選ぶ。
2	作品の第一印象、肯定度、疑問を書く。そして、疑問について取り組む時間を確保する。
3	表現で扱った題材を想起させ、作者の思いや意図について思い出させる。
4	鑑賞会の最後に、作品の情報や自身の考えを話す機会をとる。

7. 2. 2. よく見る工夫(個人鑑賞)

前年度のアンケートでは、鑑賞を進めていく中で、生徒は何かしら感じえたことを言語として表現していくが、交流をしていく段階で自他の考えの差異を受け止め切れず、自信が無くなったり考えを他者のほうに寄せる行動をとったりすることがあることがわかった。自身の考えや感じ方に自信がもてない理由としては、時間の少なさ、造形的な要素の不確定さ等があげられていた。

そのため、今回は、鑑賞を個人とグループの2回に分けて行っていくことで、自身の考えに自信をもちつつも他者からの意見を取り入れてほしいと考えた。

本題材では、「色」「形」「素材・材料」の視点から、各々の選んだ鑑賞作品を鑑賞していくようワークシートの工夫を行った。気付いたことを分類できるようにすることで、視点が明確になると考えた。また、第一印象を最初に書かせることで、どこからそのイメージが来たのか等興味をもって取り組みやすくなると考えた。

さらに、鑑賞にスケッチ活動を取り入れることで、見ただけでは気付かない部分にも目がいくようにした。前段階のアンケートでは、スケッチを行った後に、色や形について気付いたことが増加すると答えた生徒が79.4%であったため、継続して行っていくこととした。ただし、スケッチは得手不得手が大きく、目的は全体の配置の把握等であるため適宜文字情報を入れてよいものとした。

7.2.3. 工夫(グループ鑑賞)

第2段階ではグループで鑑賞を行った。その際、その作品を選んだ生徒から進行役を選出させた。進行役は先に2時間その作品を色や形等の視点から鑑賞しているため、グループ内で先達としてその視点から考えることができ、自信につながると考えた。最後に、鑑賞した作品の背景の情報や個人鑑賞していく中で出てきた疑問をグループ内で共有することから起こる他者からの反応・意見も、あらかじめ自身の考えをもっていることで柔軟に受け止められるのではないかと考えた。

7.3. 実践における結果と考察

本実践で講じた手立てを、実践での様子と実践後行ったアンケート結果をもとに、それぞれの視点から結果と考察を行う。

7.3.1. 「よく見る工夫」の視点から

ワークシートの工夫では、資料1のように造形の要素ごとに気付いたことを分類する様子がみられた。分類することによって、自分がどの造形の要素に着目しやすいのか把握しやすくなり、資料2のように着目していない要素に注目してスケッチをしたりグループ鑑賞の際に尋ねたりしている様子もみられた。

⑩ よく見てみると...

ただの白じもひい

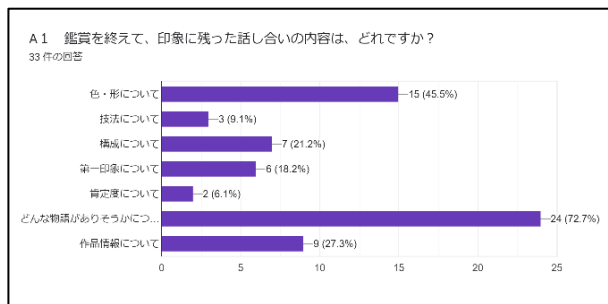
色	こい色が強い
	→ キューベットの⑥外めだつ
	→ 果物や野菜は全て色ではない
	→ ②が光っているところがある
形	キューベットの形がはっきり見える
	→ 果物や野菜は木い物ばかり
	→ キューベットの体は丸い(ぼんやりした体型)
その他	奥側にも像があり、人の足りょう。(キューベットが見える)
	→ 左側から光があたっている
	→ 真ん中にキューベットがいる
その他	立体感があり、浮き出ている

資料1

⑩ よく見てみると...

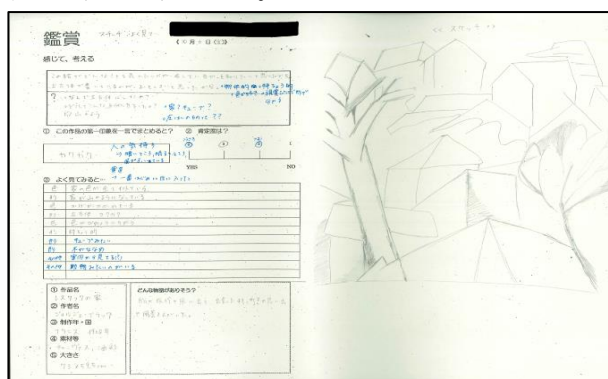
色	赤系の色が目立つ
形	右の木の形が立体的
形	角の多い
色	色で表現している
その他	トリアングルで表現している
その他	糸足が淡山草になっている
その他	月の形がフラットな線のようになっている
その他	木のようになっている

資料2

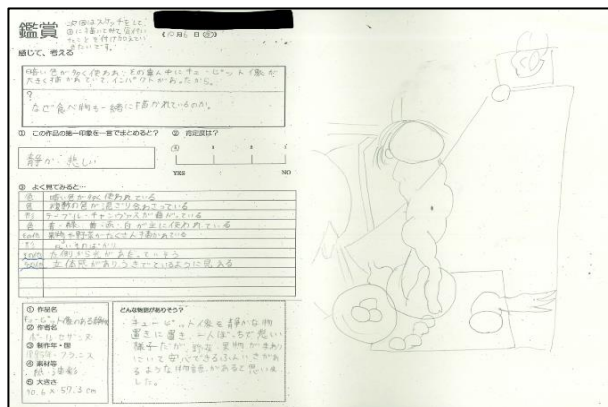


アンケート1

また、アンケート1にあるように、話し合い活動の中で印象に残った内容を「色・形について 45.5%」、造形の要素から考える「どんな物語がありそう 72.7%」と回答していることから、造形の要素をもとにグループ鑑賞を行った様子が見られた。



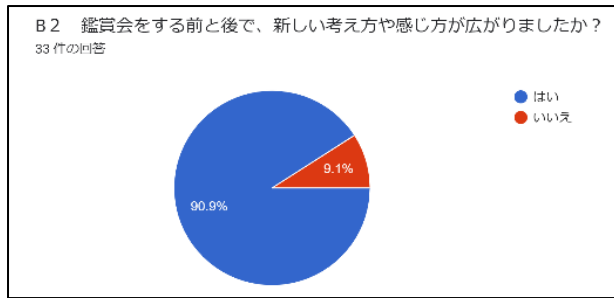
資料3



資料4

スケッチの工夫では、資料3・4のように大まかなスケッチを行うことで、特に形に着目する様子が見られた。またそれに波及して作品全体をよく見るようになり、形以外の造形の要素に着目する様子も見られた。また、グループ鑑賞の際はスケッチを見せることで、どの部分に着目しているのか他の生徒に伝わりやすくなる様子も見られた。

7. 3. 2. 工夫(グループ鑑賞)の視点から



アンケート2

アンケート2にあるように、グループ鑑賞を行うことで、新しい考え方や感じ方が広がったと感じていると答えた生徒が90.9%となった。また、その内容について尋ねた設問(アンケート3)では、自身の考えをもちながらも他者の意見を肯定的に捉える様子が見られた。

- ・私は、モグラの手は普通に生えているだけだと思っていたけれど、一緒に鑑賞をした人の中にはいっぱい手が生えているモグラという人もいて、そういう見方もあるのかと思った。
- ・何回か交流することによってみんなが言っているのと自分の意見などくらべるとまた新しいところが見つかったりしました。

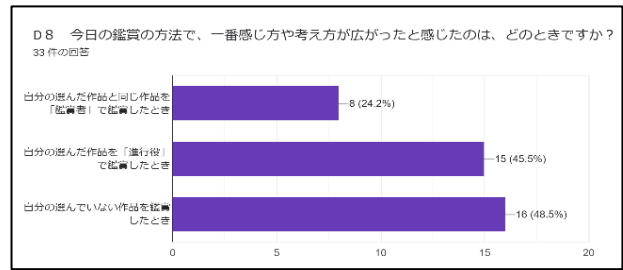
アンケート3

8. 今年次研究の成果と課題

本校美術科における新たな研究では、主題を「他者との関わりを受け止め、活かす生徒の育成」とし、副題を「自分なりの疑問をもち、他者と一緒に課題に取り組むことのできる生徒育成の方略の研究」とした1年次の研究をメインに述べてきた。以下では、主にその1年次研究の成果と、それをうけた今後の展望について考えていく。

8. 1. 研究の成果

これまで述べてきた通り、個人観賞とグループ鑑賞双方に2つの工夫が相互に関係を及ぼしている様子が見られ、手立てとして有効だったと感じている。また、グループ鑑賞では、①自分の選んだ作品を進行役として司会をしていくパターン②自分の選んだ作品を他の生徒と同じく鑑賞者として鑑賞していくパターン③自分の選んでいない作品を鑑賞者として鑑賞していくパターンの3パターンの立場を用意し、どの立場で鑑賞したときに一番感じ方や考え方が広がったと実感するか実験的に行った(アンケート4)。



アンケート4

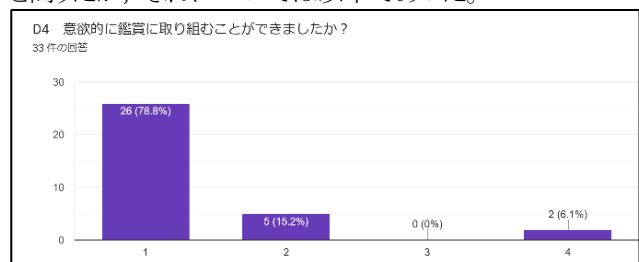
その結果、3パターン全てでは③の立場が生徒にとって一番実感があつた。自身の選んだ作品に絞ってみると、①の立場に一番実感があつた。アンケート4の理由を見てみると、

- ・自分はどう思う？ってきけたからよかつたし、進行役以外だったときは自分から疑問をぶつけあえたし(いい意味で)自分にはなかつた新しい発見ができたからです。
- ・自分が知らない作品を見てこうじゃないか？というところを、相手の人は、ここはこうだからこういう作品なんじゃないかというよく見てみないとわからないとこに気づいていたから。
- ・予め調べたり考えたりしていたものは共感などが多かったが、選んでいない作品を鑑賞したときは、自分の考えも他の人の考えもすごく新鮮で、考えることが非常に楽しかつたから。
- ・自分が進行役として鑑賞したとき、自分が気づかなかつたことや、新しい考えも教えてもらうことができたから。自分の選んでいない作品を鑑賞したとき、他の絵の特徴や、物語などの考えで、選んだ人の考えの一部になつたから。

アンケート4の理由

以上のようになっており、自信をもって鑑賞に取り組めた様子があつた。

また、アンケート5では「意欲的に鑑賞に取り組めたか」と問うたが、それについては以下であつた。



アンケート5(4件法。1が「十分にできた」、4が「できなかった」)

およそ8割の生徒が「十分にできた」と回答している。この結果に対する記述式の回答(アンケート6)を見ると、以下のようなものがあつた。

- ・司会の時以外全て初めて鑑賞した作品でしたが、作品から気づくことをしっかりと考え、そこからその作品のストーリーまで考え、自分の考えを持ち、それをグループの人に伝えることができたからです。
- ・作品を見て自分は鑑賞していない物も具体的に考え、取り組むことができたから。

アンケート6

これらの回答には「自分の考えをグループの人に伝えることができた」や「自分は鑑賞していない物も」という表現が見られる。これは、今回講じた手立てが、本研究の副題として設定した「自分なりの疑問をも」つことや「他者と一緒に課題に取り組む」ということの萌芽となっていると捉えることができるのではなかろうか。それが、本校美術科の一番の成果であると考ええる。

8. 2. 今年次研究の課題と今後の展望

今年次研究においては、個別最適な学びのうち、特に「学びの個性化」に焦点を当てて実践を進めることができた。具体的には、鑑賞の際に、あらかじめ自身の考えをもつことで、他者の考えを柔軟に受け止められるということがわかった。

一方で、他者と関わりながら学習を進めていく視点では、課題がある。他者と話しながら鑑賞する様子が見られたものの、協働で新しいものを創り出していくような部分には物足りなさを感じるのが現状である。

作品を創造するにせよ、作品を鑑賞するにせよ、あくまで造形的な視点を外すことなく他者と適切に協働し、新しい価値を生むような授業づくりが、これからの本校美術科の課題である。

したがって、次年度の研究においては、協働的な学びを創発する「グループ鑑賞の仕組み」について、新たなアプローチの仕方を試し、それを確かなものにしていきたいと考える。

参考文献・論文

- (1)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(67)」
- (2)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(68)」
- (3)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(69)」
- (4)北海道教育大学附属旭川中学校。「研究紀要(70)」
- (5)文部科学省。「学習指導要領解説 美術編(平成29年7月)」
- (6)「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)(中教審第228号)【令和3年4月22

日更新】

- (7)「鑑賞のファシリテーション～深い対話を引き出すアート・コミュニケーションに向けて～」平野智紀